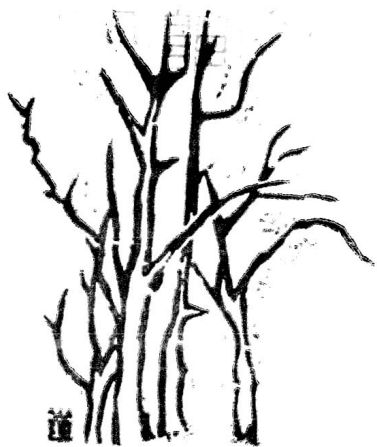




道

鳥通うみち
伊藤泉子句集

句集 鳥通うみち

昭和53年3月15日発行

著者 伊藤泉子

発行所 海程新社

発行人 阿部完市

〒336 浦和市広ヶ谷戸301

浦和神経サナトリウム 阿部完市 方

印刷 共栄印刷株式会社

〒515-02 松阪市櫛田町656

製本所 株式会社修明社製本所

〒602 京都市上京区猪熊通り下立売南入

定価1,500円

「噛み候」

——序にかえて

金子 兜太

泉子さんは、はじめは、昭和四十三年以降の作品で、この句集を編むつもりだった。「春の夢・抄」が欠けていたのである。私が、もっと初期のものはないのか、とたずねると、二十代のはじめごろと、それからしばらく作句をやめたあと、ふたたび作りはじめたときと、二度にわたって、長谷川かな女先生に教えていただいたから、その時期のものがあるとのことだった。しかし、そのころのものはまったく未熟なので、と活字にしたがらないのである。「なつかしいものもあるにはありますが」と。

意図の潔癖なところはよくわかるが、私は反対した。長谷川かな女という人の作風には、なかなか自由なところがあり、晩年ことに

こだわりがなかった。長谷川かな女指導の伊藤泉水俳句というものが、どんな表情を呈していたか、私は見てみたいとおもった。

それに、昭和四十三年以降の泉水俳句は、既成俳句の常識から見れば、いささか特異な作風のものかもしれない。とすれば、初期作品を収載して、そこから現在にいたる変化の妙を示すのも一興であろう、研究者には有益であろうとおもった。そこで私は、昭和四十三年以前の作品を書きだすように、つよくすすめたのである。

「春の夢・抄」はそういう経緯でこの句集に加えられた。まだまだ、その時期のものはあるとおもいますが、もともと発表しながらなかつたのだから、このていどの句数でもやむをえまい。そして拝見し、私は、三つ子の魂百までも、とはよくいったものだとおもった。現在の作品の特質と、このころのもののが、はつきり繫っているからである。私は先ほど変化の妙などといったが、変化というより積み上げ、つまり積貯の妙といったほうがよいのかもしれない。基本は、初期作品でしっかり出来上っていたのである。

「春の夢・抄」のなかの私の好きな句。

大都會が紅葉する日の夕鳶

三月を耳目なき堀ばかりなる

蛸に地の断層を傾けし

初月夜影のごとくに塵捨つる

きつちりと早足で来る万歩秋冷

小袖たたむたたむことばかり春の夢

こういう作品に、女流の初期的な感傷や透明の予断は許されまい。感傷でなく意思といたいたいもの、透明でなく濃縮といたいたいものがあって、よい意味でのおとなぶり、いわば、かなりにおとなびた意識と、それを表現へと幹旋してゆくなかなかの才気を感じる。「小袖たたむ」のようなリリカルな句にしてからが、決して情感をたゆたわせているだけのことはおわっていないのである。

したがって、昭和四十三年以降、ことに五十年あたりからの、句会などでも問題になり、泉子俳句の滑脱ぶりを注目させた、「作品Aはこぶ老人Bの広場」といったし、らばくれたことばの操作も、「富士が見ゆるもう少し右寄りの丘」のような心理の身軽な遊弋も、「霧のよう子宮のことば母子草」のような一見妖^{あや}しげなおとぼけも、そうかとおもうと、「雪汁よ上州悲話を噛み候」などと土俗をくすぐる手際も、決して突然の産出とはおもえないわけで、初期作品の才気に、その後の作句中断期間が加えた経験の厚みを知ることができるのである。若若しく遊んでいる印象さえある。ふたたび作りはじめたとき、泉子さんはすでに優遊のころを体得していたのかもしれない。後記で、『再びかな女宅を訪れたとき、「こんち俳句をなさる方が多うござんすよ」と優しく八十才の重みで話された。』と、ニコニコしながら泉子さんは書いているが、八十才のかな女の稚心と、中年の泉子の成熟した才気との出会いがたのしい。自由というものがながれている。

そんなわけで、この句集から、いわゆる女らしい心情の世界（かの日本の女ごころのリリズム）を期待することは、まず無理といっておきたい。そうではなくて、一人の女性の（人間の眼）を期待したほうがよい。その屈折、どこか艶^{えん}、どこか妖^{えい}にしておかしげなる態^{てい}を、こだわりなく味わえばよい。たとえば、一泊や二泊の吟行会に出かけても、こういううれしくも定かなる句を作ってしまうところを、見てもらえばよい。

青山^{せいざん}さらに滝あり水の東北は

山の湯は草木のたぐい脂身照る

黒牛か群馬一山か鋭に立つ

——一九七七年（昭和五十二年）冬、記す。

目次

序にかえて／金子兜太	1
春の夢・抄	△昭和二十二年――四十二年まで▽11
草萌え	△昭和四十三年四十四年▽25
四月巷	△昭和四十五年▽29
風の櫓	△昭和四十六年▽39
花憂愁	△昭和四十七年▽51
鳥通うみち	△昭和四十八年▽59
俯瞰図	△昭和四十九年▽67
野の火色	△昭和五十年▽81
思惟の坂	△昭和五十一年▽99
風媒地	△昭和五十二年▽115
後記／伊藤泉子	127

句集 鳥通うみち

春の夢・抄

昭和二十二年—四十二年

雪残る山肌近く湯宿の灯

芥子朱く小箱の朱く汝が室の

灰勝の来たり夏服連れ立ちて

以上昭和二十二年

冬の虻針山に針見付からず

机拭く指脹らませ今朝の冬